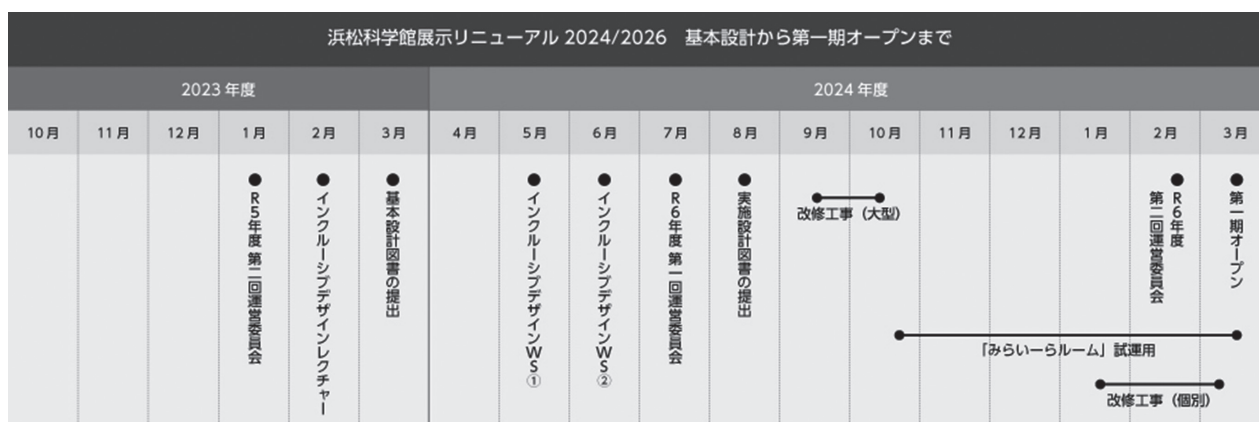


幅広く利用される場を目指して ～浜松科学館 展示リニューアル 2024/2026（第一期）～

事業企画グループ マネージャー 加藤 香名子

概要

浜松科学館は、2019年度に全面リニューアルを行い、その5年後となる2024年度と7年後となる2026年度に、展示の一部をリニューアルすることが計画されている。本稿では、おもに2024年度の第一期完成までの工程や実際の取組を報告し、これまでのプロジェクトをふりかえる。



1. はじめに

浜松科学館では、2019年に実施した全面リニューアルから5年目にあたる2024年度および7年目にあたる2026年度に、常設展示の一部を更新する計画を立案している。本計画は、科学分野における進展および最新の科学的知見、科学技術動向を展示内容に反映させることを目的とし、常設展示全体のおおむね1割程度を目安に段階的な更新を行うものである。本事業は、指定管理者制度に基づく指定管理業務の一環として実施される。（資料1）

本事業の実施にあたり、2022年度後半から「展示リニューアルプロジェクト」を立ち上げ、浜松科学館で現場運用を担う各部署の職員、所管課である浜松市職員、ならびに市内に拠点を置く建築家・辻琢磨氏（合同会社辻琢磨建築企画事務所）を構成員とする「展示リニューアルプロジェクトチーム（以下、PT）」を結成し、検討および設計を進めてきた。

2. プロジェクトのプロセス

2024年度は、前年度末に提出した基本設計図書に基づき、展示および施設整備の内容を具体化する実施設計段階として、実施設計図面等の作成を行った。主な内

容は、ワークショップスペース「みらいーらルーム」の整備、可動式展示台「ワゴン」の導入、身近な日用品を素材とした展示「へんでこ楽器」の新設に加え、授乳室やサイン、ウェブサイト等に関するアクセシビリティの改修・新設、ならびに設備機能の強化（みらいーらステージへの給排水設備の追加等）である。各更新箇所については、PTによる定例協議を通じて検討を重ね、2024年7月の運営委員会にて報告および承認を経て、同年8月末日に実施設計図書を提出した。実施設計の検討過程においては、次章に述べる「インクルーシブデザインワークショップ」を実施し、本展示更新の視点として掲げる「ソーシャル・インクルージョン」の実現を図った。

2. 第一期更新の全体構想

遊環構造に沿う多様な「遊び」の創出 — ROOM + WAGON —

※実施設計を設計した建築家、自由建築（建築デザイン研究所）の建築事務所である「建築家」に、展示更新の専門家である「展示更新」を協賛する「展示更新」を協賛する。展示更新の専門家である「展示更新」を協賛する。展示更新の専門家である「展示更新」を協賛する。

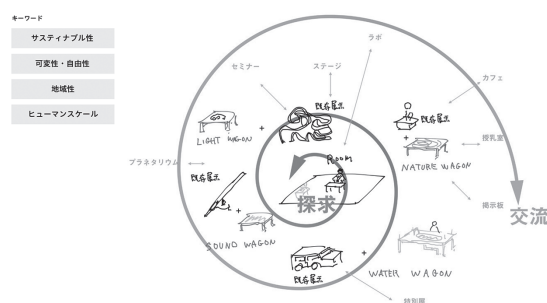


図1：第一期更新の全体構想

3. インクルーシブデザインワークショップ

実施設計図書の作成に際して、特定非営利活動法人 Collabe の協力を得て、市内在住の「リードユーザー」を招き、2日間にわたるインクルーシブデザインワークショップを実施した。本ワークショップは、自分たちの環境からは「遠い人」（何らかの事由によりその環境の利用に障壁をもつ方々）と協働することにより、従来の視点では把握しにくい課題や価値観を共有し、事業や場を「ともにつくる（共創する）」ことを目的としている。これに先立ち、前年2月には全職員を対象とした事前研修会を実施し、Collabe 代表・山田小百合氏による講義とともに、「浜松科学館におけるリードユーザーとは誰か」をテーマとしたグループワークを行った。その結果、身体的・言語的な障害（バリア）を有する方… 車椅子使用者、視覚障害者、聴覚障害者、外国にルーツを持つ方を浜松科学館のリードユーザーとし、4名の当事者に参加を依頼した。

本ワークショップは、個別展示の仕様検討を直接の目的とせず、科学館全体の利用しやすさ（アクセシビリティ）および来館体験の向上を主題とした。観察や対話、アイデア創出の過程を通じて、各リードユーザーが抱える利用上の不安や課題が可視化され、それらを共有できた点は、本事業における重要な知見となった。さらに、本ワークショップで得られた、各参加者からの言語化された意見や示唆を整理・集約し、浜松科学館の運用指針として「DE&I（Diversity, Equity & Inclusion）ポリシー」を策定した。

更新箇所においては、授乳室等における巾木部分の配色を視認性の高いコントラスト設計へと変更したほか、車椅子利用者が展示台に十分に接近できる構造のワゴンを導入した。また、トイレのピクトグラムや一部サインについてもロービジョンの方の助言を踏まえた改修を行った。

本ワークショップに参加したリードユーザーとは、その後別の機会にお声がけをいただくなど、関係が続いていることを有り難く感じている。過去に受講した「やさしい日本語」に関する研修で講師の方がおっしゃっていた、「在留外国人は社会の中で“透明化”されている」という指摘が思い出され、多様な背景を有する人たちがともにいて、ともにつくること、その重要性を発信していく必要性を改めて認識した。



図2：リードユーザーを招いたワークショップ



図3：アイデアの創出

4. 工事～オープン

2024年9月の連続休館期間を活用し、主要箇所の大規模改修工事を実施した。その後約1か月間は開館を継続しながら段階的に個別改修工事を行った。工事の実施に先立ち、広報誌やウェブサイト等を通じて日程の周知を行い、来館者の理解を得ながら進めた。施工にあたっては、辻氏および館職員が建設会社と随時現地確認を行い、設計意図の共有と調整を図った。10月下旬には主要な整備が概成し、「みらいーらルーム」は仮オープンとして試行的な運用を開始した。



図4：授乳室の改修

5. 広報およびプロモーション

広報面では、館内の広報担当職員を中心に方針検討を行い、ティザー期とオープン期の2段階でそれぞれ施策を実施した。ティザー期は、第一期改修のコンセプトとなる、可変的な交流空間の整備を通じて、来館者が多様な関わり方を選択できる場の創出による「利用の幅」の広がりをもつ訴求内容とした。この意図を表現するため、「わたし□ みんな□ 浜松科学館」というコピーを設定し、四角部分に自分と科学館との関わりを自由に入れられるようなデザインとした。

具体的な内容としては、辻氏をはじめとする関係者および市内在住者にご出演いただいたPRムービーを作成したほか、チラシ、ポスターを制作し、市内公共施設および文化施設等へ配布した。合わせて、本リニューアルの概要を伝えるティザーサイト（ランディングページ）も作成し公開した。

同時期に開催した春の特別展「東海道新幹線ずかん」との連動を図り、新聞・雑誌広告、テレビCM、ラジオCM、駅構内ビジョン広告等、多様な媒体を活用した広報展開を行った。加えて、大型商業施設やスポーツイベントへの出展など、館外でのPR活動も複数回実施し、本リニューアルと併せて浜松科学館全体の認知向上を図った。



図5：リニューアル告知のポスター

6. オープン後

2025年3月中旬まで微調整を含む個別工事を継続し、同年3月20日に第一期展示リニューアルを正式公開した。公開当日には記念式典を開催し、浜松市長、市議会議員、関係機関および協力者等、約40名に出席いただいた。式典ではリニューアル概要の説明を行った後、更新箇所の視察を実施。「へんてこ楽器」展示では、設計・制作を担当したファブラボ浜松による実演も行われた。

(1) みらいーらルーム

午前中は「ちょこっと体験」と称した短時間型ワークショップを実施し、職員やボランティアが考案した実験等を提供し、午後は従来から継続している実験・工作ワークショップを実施している。常設展示動線に隣接する開放的な空間であることから参加の連鎖が生じやすい一方、場所の認知に関する課題も確認されている。



図6：みらいーらルーム

(2) ギャラリースペース

みらいーらステージ背面にギャラリーウォールを新設。館内の体験をより充実させる科学関連の展示や、市民の発表の場として機能することを目指している。

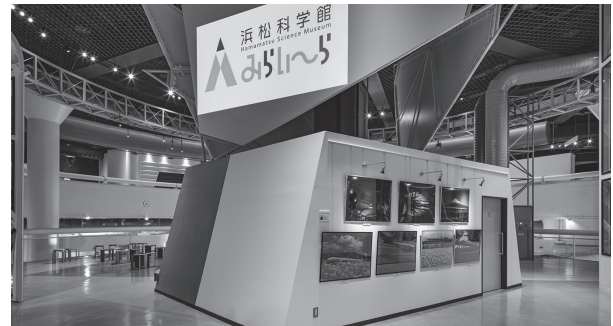


図7：ギャラリースペース

(3) ワゴン

ワゴンは可変性を有する展示台として導入し、音ゾーン、カゾーンを中心に配置している。展示内容と連動したクイズ冊子等にも活用しているが、定期的な展示更新には至っておらず、今後の運用方法の検討が課題である。



図 8：音ゾーンのワゴン

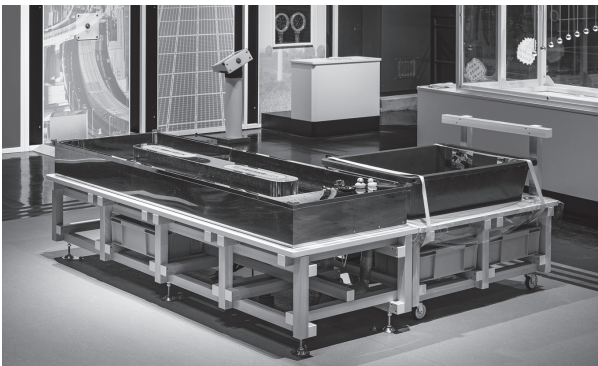


図 9：カゾーンのワゴン

(4) へんてこ楽器

身近な日用品を使った「楽器ではない楽器」が集まる展示。オブジェのようなインパクトのある造形を有し、幅広い年齢層の来館者による体験が確認されている。



図 10：へんてこ楽器

(5) 授乳室

1階および2階に授乳室を新設。おむつ替えスペースおよび扉付き個室型授乳室を備え、乳幼児連れ来館者の利便性向上を図っている。



図 11：授乳室

(6) ボランティアルーム

ボランティアメンバーの主体的な活動をより支援できるよう部屋を設けた。ミーティングや活動の準備室として利用している。



図 12：ボランティアルーム

(7) サイン

デザイナー阿部航太氏の協力のもと、トイレサインの更新、誘導サインの追加、新設箇所のサイン制作を行った。JIS規格等で広く認知されているピクトグラムを基調とし、視認性と心理的安心感の向上を意図したデザインとした。



図 13：トイレサイン

(8) ウェブサイト

焼津市のウェブ制作会社である株式会社ナインにご協力いただき、ウェブサイトの全面改修を実施した。UDフォントの導入等、ウェブアクセシビリティに配慮した設計とし、一部ページではアクセシビリティ診断を実施している。

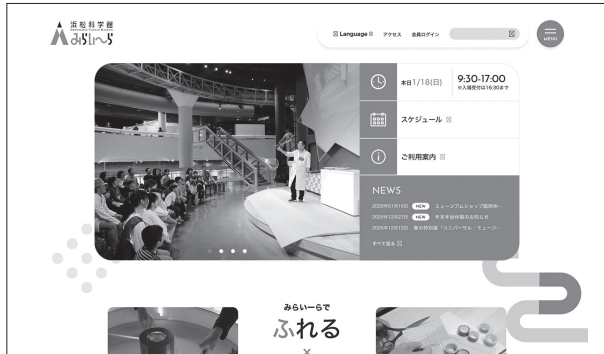


図 14：リニューアルしたウェブサイト

7. ミュージアムはだれのもの？

2024年11月に長野県で開催された全国博物館大会では、地域社会におけるミュージアムの役割について議論が行われた。その根底には、「ミュージアムは誰のためのものか」という問いが込められていたように感じている。知識人や権威者による知識機関として設立されたミュージアムは、歴史を経て、市民に開かれた公共空間へと変容し、地域課題への応答性や、市民参画の促進が求められている。

川島伸子・小林真理・土屋正臣 著の『新時代のミュージアム』には、以下のような記述がある。

“社会教育法上または博物館法上、ミュージアムは社会教育施設として位置付けられている。(略) このように、ミュージアムには人々の社会における学びを支援しながら、貴重な資料を保存し、後世に引き継ぐという社会的使命を負っていることは、現在そして将来にわたっても変わらない。同時に今日のミュージアムは、市民参加や市民との協働、まちづくり、観光資源開発などの従来の社会教育的役割に限定されない幅広い役割を担っている。”

“教える側 = ミュージアム, 教わる側 = 来館者という固定的な関係から脱却したミュージアムの1つの答え

として、広く、誰もが楽しむことのできる博物館活動が持つ社会的影響力は小さくない。また、こうした活動の成立には、博物館による「上から」の発案だけでなく、博物館ボランティアのように、来館者目線に立って博物館活動に対する積極的な理解や支援をする人々が存在することも追い風となっている。”

本リニューアルにおける主要改修箇所の「みらいーらルーム」は、利用者主体の活動と交流を促進する場として構想され、ミュージアムの公共性を再考する試みの一つである。今後も、幅広い利用者が主体的に関与できる場のあり方について検討と実践を重ねていく必要がある。

8. 第二期に向けて：文化観光とミュージアム

全国博物館大会においては、「文化観光」という概念も重要な論点として提示された。ミュージアムを観光資源として捉えることに対しては慎重な意見も存在するが、文化庁は文化観光推進法において、文化振興と観光振興、地域活性化の好循環を生み出す枠組みとして文化観光を位置づけている。

“文化観光推進法は、文化の振興を起点として、観光の振興と地域の活性化につなげ、これによる経済効果が文化の振興へと再投資される好循環を創出することを目的としております。(略) このような好循環を創出する原動力となるのは、地域でまだ十分に光が当てられていない文化資源を含めた様々な文化資源の魅力に触れ、文化への理解を深めることができる機会を国内外からの幅広い来訪者に提供することです。文化観光推進法では、文化資源の観覧や体験活動等を通じて文化についての理解を深めることを目的とする観光を「文化観光」と位置付けております。”

第二期展示リニューアルでは、「展示ストーリーブック」の改修および、それに関連するシンボル展示の更新を予定している。今後は、地域文化の理解促進と来訪者の体験価値向上の両立を図りつつ、文化観光を担う拠点としてのミュージアム機能の充実を目指していきたいと考える。

参考資料

- ・浜松科学館 第一期展示リニューアルランディングページ
<https://lp.mirai-ra.jp/>
- ・文化観光 | 文化庁
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/bunkakanko/index.html
- ・『新時代のミュージアム』 著：川島伸子 / 小林真理 / 土屋正臣 出版：ミネルヴァ書房 出版年：2020年

資料1：事業スキーム

事業名	浜松科学館展示リニューアル2024/2026
事業期間	2024年度（第1期） 2026年度（第2期）
事業予算	第1期 48,999,500円 第2期 50,000,500円 (いずれも消費税込金額) 協定書第31条第4項及び第5項の規定に基づき、業務完了検査後、展示更新に関する指定管理料として浜松市が指定管理者に支払う。
事業スキーム	1 事業形態 DBO 協定書に基づく指定管理業務の期間内事業として実施 2 目的 「各科学分野の進展や最新の科学的知見、展示協力企業の持つ科学技術の状況を鑑み、指定管理期間を通じて常設展示数の1割程度（企業協力展示を除く）を目安に計画的に更新していくものとする。」（運營業務に関する要求水準書より抜粋）